ペイ・フォワード

～トレヴァーから学んだこと～

田中　絵美

執筆者データ: ①英語タイトル PAY IT FORWARD ～What I Got from Trevor～
②英語名 Emi Tanaka　**③所属** 文化研究専攻欧米言語文化講座 英語圏
④　　**⑤**　　**⑥**
⑦この論文を書くにあたっての関心事 ペイ・フォワードで世界を変えることは可能なのか　どんな人間もほんとうに優しさを持っているといえるのか　誰にでもペイ・フォワードは実行できるのか　なぜ主人公は死ななければならなかったのか　原作と映画に共通している独特な手法が与える効果とは　原作と映画のどちらがおすすめか

Ⅰ. 作品紹介

この『ペイ・フォワード』には、キャサリン・ライアン・ハイド（Catherine Ryan Hyde1955,－）というアメリカの作家が書いた 2000 年の原作と、その原作をもとに作られた映画とがある。後者はアメリカでは 2000 年 10 月、そして日本では 2001 年 2 月に公開され、『ディープ・インパクト』のミミ・レダーが監督、『シックス・センス』『AI』等で天才子役の地位を確立したハーレイ・ジョエル・オスメントが主演していることもあり、おそらくこちらの方が有名であろう。私自身もこの論文を書くにあたって、調べてみて初めて原作の存在を知った。実は全世界でベストセラーになっており、日本語訳を手に入れて読んでみると、原作と映画とではかなり違いがあることがわかった。

↑日本版 DVD のパッケージ

原作は文庫本でも４００ページ以上であるのに対して、映画は１２３分におさまっていて、原作のエピソードがいくつか省かれていたり、細かい設定が変わっていたりする。ボリュームから言えば、じっくり考えさせられるのは原作の方かもしれないが、私個人の感想としては、映画もよくできていて、必要不可欠な要素や作り手が伝えたいことはしっかり描かれていると思う。また、主人公のトレヴァー役を演じたハーレイ・ジョエル・オスメントは、１０人中１０人が素晴らしいと評するような演技をしているので、原作は読みたく

ないという人にも、映画はぜひ見てほしい。そして、“ペイ・フォワード”というシステムを知れば、きっと誰もが優しい気持ちになれると私は信じたい。

Ⅱ. ペイ・フォワードとは

では、そのペイ・フォワードとは一体なんなのか、それを説明したいと思う。

物語の舞台は1990年代前半、カリフォルニアの小さな町に住む12歳（映画では11歳）のトレヴァーという少年が主人公である。ペイ・フォワードとは、彼が社会科の授業で新任教師から出された自由研究、「世界を変える方法を考え、それを実行しよう」という課題の答えとして考え出したものであった。そのシステムは非常に単純明快で、１人が３人の人間に何か親切をし、その親切を受けた人は、相手にではなく、また別の３人に親切な行いをする、というものである。親切にした人が、恩返しは自分ではなく、他の３人に代わりにしてあげてほしいと頼むのである。こうすることで、以上の図のように“善意の輪”を広げていこうというのである。

トレヴァーの計算によれば、この計画の１６段目には４３０４万６７２１人の人間が他人から親切な行いを受け、もう何段か進めばその数は世界の人口を上回るものになる。この途方もない計画の成功の鍵は“人を信じること”である。なぜならこれは、自分が親切をした相手が、善意を次の人たちへ渡してくれると信じてこそ成り立つものだからである。しかし、そんな些細な信頼ですら成り立ちにくいのが今の世の中であり、これは『ペイ・フォワード』の舞台であるアメリカだけでなく、日本にも言えることである。私自身もこの物語に登場する多くの人と同様に、「こんなのうまくいくわけがない」と疑わなかったわけではない。しかし大切なのは、ペイ・フォワードが実現するかどうかの議論ではなく、そこから何を学ぶか、少しでも何か自分によい変化を与えられるか、ということではないだろうか。

Ⅲ. ペイ・フォワードはどのように広まっていったのか

では、この夢物語のような計画がどのように発展していったのかを、原作のストーリーを軸に述べたいと思う。

ペイ・フォワードは、この計画を思いついた主人公トレヴァーが、実際に3人の人に対して親切な行いをしたことから動き始めた。その3人は、彼にきっかけを与えた社会科教師のルーベン・セントクレア(※この人物は映画では少し設定が変わって、名前もユージーン・シモネットとなっている)と、路上生活者のジェリー、そして近隣に住むグリーンバーグ夫人である。

トレヴァーはまず、ルーベンを、トレヴァーの父親であるリッキーに逃げられた自分の母親アーリーンに引き合わせ、二人の仲をとりもとうとした。ルーベンはベトナム戦争で片目を失った黒人であり、アーリーンはひどい男であるリッキーを忘れられず、女手ひとつでトレヴァーを育てながら、アルコール中毒になってしまっていた。トレヴァーはそんな心に傷を負った2人に幸せになってほしいと考えたのである。2人はいくつもの障害を乗り越えて、最終的には夫婦になる。これはトレヴァーがはじめに考えた3つのことのうち、最も複雑で無謀なことのように思えた。しかし、2人のことを本当に好きだった、彼の子どもらしい純粋な発想であった。そしてその後、ルーベンとアーリーンは、150万ドル以上のお金を寄付するなどして、ペイ・フォワードを実行する。

路上生活者のジェリーにトレヴァーがしたことは、彼が定職に就くために身なりを整えられるよう、お金を渡したことである。しかもそのお金は、トレヴァーが新聞配達で稼いだ自分のものなのである。このエピソードには確かに無理があるかもしれない。自分を犠牲にしてまで他人に、それも素性の知れない路上生活者に親切にできる人なんてほんとうにいるのだろうかという疑問を抱かずにはいられない。しかしトレヴァーはこう言っている。「すごいことなんてしなくていいんだ。ぜんぜんね。相手にとって役に立つことだったら、それでいいんだ。必要なことは、それぞれちがうんだからね。」トレヴァーの望んでいることは、親切を受けた人が犠牲を払ってまで別の人に恩返しをすることではなく、ただその人のできる範囲内で“いいこと”をすることなのである。ジェリーは後にトレヴァーの期待を裏切り、再び麻薬に手を出して路上生活者に戻ってしまうが、飛び降り自殺をしようとする人を助けるという形で、ペイ・フォワードを実行していた。トレヴァーはジェリーが逮捕されたと知った段階で、自分の計画のスタートの3分の1は完全に失敗に終わったと思っていたのだが・・・。

ペイ・フォワードには決して悪人を善人に変えてしまうほどの力があるわけではない。ただ、ごく一部を除いて、どんな人間も心の中に持っているであろう、隠れた優しさを引き出すことのできるシステムだと考えられる。ストーリーの中に、暴力的な男や薬物中毒の男、刑務所に入っている男がペイ・フォワードを実行するエピソードが盛り込まれているのは、筆者がそういうことを伝えたかったか

らだと私は思う。

そしてトレヴァーは、新聞配達先のグリーンバーグ夫人には、年老いた彼女の代わりに、大切な庭をきれいにしてあげた。このエピソードは映画には全くなかったもので、グリーンバーグ夫人はトレヴァーを心から応援し、自分も必ずペイ・フォワードを実行するとトレヴァーに約束していた。そして、自分の死が間近に迫っているのを感じたとき、遺産をどうしようもない自分の息子にではなく、自分のことをいつも気にかけてくれたスーパーの店員たち3人に分配する手続きをしたのである。その後、グリーンバーグ夫人はすぐに亡くなってしまったため、トレヴァーはまたもやペイ・フォワード計画が失敗したと思った。しかし、後に、クリス・チャンドラーという記者によって、自分の知らないところでこの計画が大成功していたのを知ることになるのである。

Ⅳ. ペイ・フォワードの成功はどのように伝えられたのか

この作品には、原作にも映画にも共通の興味深い構成が見られる。それが、ちょうどペイ・フォワード運動とは逆行するように、1人のある記者が運動に関わった人々を順番に訪ねていくというものである。彼の名前はクリス・チャンドラー。原作でも映画でも、彼の行ったインタビューがところどころに散りばめられており、さまざまな人たちのそれぞれ異なった視点から、『ペイ・フォワード』は描かれているのである。原作者のキャサリン・ライアン・ハイド自身も「たしかに、この書き方はちょっと変わっているわね」と認め、こう説明している。「いろんなキャラクターの頭の中に入り込んでいかなかったら、ほんとうは人はみんな同じなんだっていうことがわからないんじゃないかしら。(中略)これは、本の中に登場する何人かの架空の人物の身に起きた、ただのお話なんかじゃない。わたしたちみんなの話なのよ。」

記者のクリスが調査を始めたきっかけは、彼が自分の車がエンストして困っていたときに、見知らぬ男から車をプレゼントされたという一件であった。クリスは世の中がいい方向に変わっていくのを感じ、その真相をつきとめようと動き出した。そしてそのような“親切な行い”が広まっていった順序をさかのぼって、挫折しそうになりながらも、いよいよトレヴァーのもとにたどり着くのである。

レポーターである彼のはからいによって、トレヴァーは一躍有名人になる。その頃には各地にものすごい勢いで広まっていたペイ・フォワード運動の発案者として、テレビ出演したり、クリントン大統領にホワイトハウスに招待されたり、みんなでお祝いしたり・・・すべてがうまくいっているように思えた。しかし、トレヴァーは、まだ自分は計画を果たせていないと考えていた。路上生活者のジェリーがペイ・フォワードを実行したのを知らなかったために、彼の代わりにもう1人、助けを必要としている人を探していたのである。

V. 主人公はなぜ死ななければならなかったのか

そして、この物語は最も悲しい結末を迎える。あと1人を助けるために、トレヴァーがとった行動は、複数の人間に囲まれて暴力を振るわれている弱い者を助けることであった。原作ではギャングが起こした騒動に、映画ではいじめの現場に、トレヴァーは迷わず飛び込んでいった。その中の1人にナイフで刺されるとも知らずに・・・。この結末には批判の声も多い。トレヴァーの努力を知ればもちろん誰もがハッピーエンドを思い描くであろうし、失敗を乗り越えてやっと報われたのだから、今度こそほんとうの幸せを、と願う。

やはり物事はそんなにうまくはいかないということだろうか。私はそれも、作者の狙いだったのだと思う。人はどうしても、うまくできすぎた話に疑問を持ち、リアリティを見出しにくい。そこで、最後に落とし穴を作ることで、大多数の読者や観客をぐっと引きつけることに成功した。もしもこれがハッピーエンドなら、それほど心には残らない作品になっていたかもしれないと私は思う。メッセージ性を強めるには、主人公の死が、1番効果的だったのだろう。それでも、やはり映画でハーレイ・ジョエル・オスメントが演じたトレヴァーはほんとうにきれいな瞳をしていて、彼の最期のシーンではやるせない気持ちにならずにはいられない。

原作ではトレヴァーの追悼式に、町じゅうと町につながる高速道路が大渋滞になるほどの人が集まった。各地からペイ・フォワードによって救われた人々がおよそ2万人。その模様は世界で放送された。その報道の力によって、運動はさらに広まっていくのである。集まった人々はろうそくを持って、ペイ・フォワードを実行することを誓い合った。

VI. 誰にでもできるペイ・フォワード

ペイ・フォワードの説明をするために、トレヴァーの行ってきたこと、そしてその結果をこれまで述べてきたが、やはり彼のような純粋で優しい少年がいるはずがないという意見が、大多数であろう。私自身もその1人であるが、私はそんなことはさほど重要なことではないと考えている。**私はこの『ペイ・フォワード』という作品を通して、「優しさをケチらないでおこう」という気持ちになることができた。**たいがいの人は、親切なことだとわかっていても、少し手間になったり、自分の利益にならなかったりすることは避けて通ることが少なくないのではないか。例えば、お店に行って商品が床に落ちているのを見ても、自分が落としたわけではないからと、見て見ぬふりをしたことはないだろうか。自分は暇なのに、忙しそうに家事をしている母親を手伝わなかったことはないだろうか。人のためにできる些細なことは、どこにでもあるはずである。物語ではなく現実に、「自分以外の3人に恩を返してほしい」と言うのは難しい。でも、そう言われなくても、誰だって誰かに優しくされたら自分も温かい

気持ちになって、同じように人に優しくふるまえそうな気がするのではないだろうか。

これを読んだ人には、ほんの少しでいいから、ペイ・フォワードという計画を記憶の片隅に残しておいてほしい。そして、今まで出し惜しみしていたかもしれないと気づくような親切な行いがあれば、それを実行してみるのもいいかもしれない。

⑧学んだこと：1人の純粋な少年が失敗にもめげず、最後まで人の善意を信じて成し遂げたペイ・フォワード。この運動を通して、人に親切にすることの意義を今まで以上に強く感じた。そしてこれからは、ちょっとした優しさを出し惜しみせずに過ごしていこうと思った。

⑨Summary: The movement of "PAY IT FORWARD" was established by one boy who kept on showing his kindness sincerely to others. I think it's simple and important to be kind to others and I should not spare myself to do a small act of kindness.

【参考文献】

キャサリン・ライアン・ハイド／法村里絵訳『ペイ・フォワード』角川文庫 2004年

http://www.awaji-net.com/pay-forward/

http://www.watch.impress.co.jp/movie/column5/2001/09/07/

←日本公開版映画のポスター

『A.I.』を通して学んだこと－技術発展への憧れと危惧－

守田静佳

①英語タイトル： Longing and Misgivings of Technological Innovation through *A.I.* ②英語名：Shizuka Morita ③所属：欧米言語文化講座　英語圏 ④
⑤　　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：２００１年での未来予想・機械と生き物・ロボットが感情を持つことについての見解・技術が進歩していく中での感情面における発達・母子の愛・命について

Ⅰ．この作品について

科学技術は今日私たちが生活を営んでいく上で欠かすことのできない存在となっている。技術の進歩により人間は便利さ、豊かさを手に入れた。技術はどこまで進歩するのだろう。人間が空を自由に行き来する、それはすこし以前までは、ほんの空想の世界であった。しかしそれが今では、すぐにも現実になるのではないかという期待を持ってしまうほどに、技術革新は進んできている。そしてこの期待と、隣り合わせの危惧を描いた作品が『A.I.』である。

この映画の主演は、天才子役と呼ばれたハーレイ・ジョエル・オスメント（Haley Joel Osment, 1988- ）であり、監督はスティーブン・スピルバーグ（Steven Spielberg, 1947- ）である。元々スタンリー・キューブリック（Stanley Kubrick, 1928-1999）が監督を務めるはずだったのだが、監督が死去してしまったためにスピルバーグが代わって監督をつとめた。本作品の公開は２００１年だが、原作はブライアン・オールディス（Brian W. Aldiss, 1925年8月18日 - ）の１９６９年のＳＦ小説『スーパートイズ』（*Super Toys*）である。

本作品のストーリーをなぞりながら、その中に描かれている私たち現代を生きるものへのメッセージを発見し、またそれらに関する現在の諸問題、未来への不安や危惧を明らかにしていきたい。そしてこの発見により得たものを私の成長のステップとしたい。

DVD版『A. I.』

Ⅱ．あらすじ

人間は家事や仕事全般を担う様々なロボットを生み出していた。そしてついに愛情をもつ子供ロボット、デーヴィッド（David）が開発される。

デーヴィッドの母親として、子供が昏睡状態のモニカ（Monica）が選ばれたが、彼女は最初反発する。しかしつきまとうデーヴィッドに愛着が生じ、モニカが自分を母と慕うよう設定を行なった。一度設定したら解除はできない。手放せば、デーヴィッドは破壊されるというものである。

デーヴィットに自分を母親と認識させるモニカ

しかし、まもなく実の息子のマーティン(Martin）が奇跡的に回復して家に戻ってきた。デーヴィッドに嫉妬するマーティンは意地悪をし、うまくのせられたデーヴィットは悪さをしてしまう。デーヴィッドがいつか危害を加えるかもしれないと思い、モニカはデーヴィッドを森にドライブに連れ出し、置き去りにした。

デーヴィッドは反ロボット集団に捕まりそうになるもなんとか逃げる。彼はピノキオの話を聞いており、青い妖精が人間にしてくれると信じていた。自分がロボットだったから捨てられたのであって、人間になれば母モニカはまた自分を愛してくれる…。そこで物知りロボットのノウ博士に質問したところ、『ロボットが人間になるには』という著書のある博士のことがわかった。その博士を訪ねるため、ヘリコプターをジャックしてマンハッタンに向かう。しかしマンハッタンの街はもはや水没しており、高層ビルの上部のみがかろうじて顔を出している状態であった。そのわずかなビルの中の一室が使われているのをデーヴィットは発見する。そこに侵入すると、いたのは自分と同じロボットで、しかも全員がデーヴィッドと名乗っていた。そこは彼、デーヴィッドが造られたところで、同じようなロボットがたくさんあったのだ。それを見たデーヴィッドは、どうしても受け入れることが出来ずに海中へ飛び込んでしまう。

デーヴィッドは、飛び込んだ海底で青い妖精を見つけた。彼は一旦乗ってきたヘリで海底に潜り、コニーアイランド（遊園地）の妖精の像を見つめて祈った。デーヴィッドはひたすらに祈り続け、ヘリのライトが切れてもやめなかった。しまいにはデーヴィッドも動かなくなったが、その瞳は妖精を見つめたままだった。

それから２０００年の時が過ぎ、マンハッタンの海は氷結し、宇宙人が部分的に掘削していた。そしてデーヴィッドと青い妖精も掘り起こされる。宇宙人が手をかざすとデーヴィッドは動き出した。

デーヴィッドが抱きしめると青い妖精は崩れ去った。信じ続けた青い妖精の崩壊にショ

ックをうけるデーヴィット。宇宙人は彼の記憶からデーヴィットの家を再現してくれた。そして彼の持っていたモニカの髪を渡すと、モニカを再生してくれた。しかし宇宙人の技術をもってしても、再生された者は一日しか生きられない。

デーヴィッドは生まれてから一番幸せな一日を母と二人きりで過ごした。そして母が眠るのを見届け、自分も眠りについた。

Ⅲ．本編で感じたこと

この作品には大きく分けて２つの主題が存在する。ロボットと愛情である。感情、特に愛情は通常生物にのみ存在するものである。とは言っても無生物に感情を与えるという行為は、昔からおとぎ話の中でさんざん行われてきた。その点から見ればこの作品も一種のおとぎ話なのだろう。

Ⅰ．で述べたとおり、この物語の原作が発表されたのはおよそ４０年前。これは非常に興味深いことである。先ほども述べた通り、無生物に感情を与えることは４０年どころか、更に以前から描かれている。勿論ロボットもその中に登場しているだろう。しかしこの作品の興味深い所というのは、感情のあるロボットに焦点をあてて物語を描いている事である。私自身、この作品を見るまで、ロボットが感情を持つということの深刻さ、複雑さを考えたことはなかった。

ｉ．ロボットと感情

確かにロボットが感情を持つということはとても便利なことである。これまで人間でなければできなかった仕事も、ロボットが感情を持つことによって代替が可能になる。例えば家政婦やベビーシッター。日常の家事や子守りというのは精神的にも肉体的にもなかなか大変な仕事である。しかしこれらをロボットが代行可能になれば、彼らは疲れて動けなくなったりストレスで病気になったりしない。人間のように弱くもない。育児に疲れて子どもに暴力を振るったり、お年寄りの介護を放棄したりという事件が深刻化してきている世の中、彼らはこの一種の社会現象を解消してくれる頼もしい存在になりうるだろう。

けれどもそれが本当に良いことなのだろうか。これは本編中の私たちに対する問いかけの一つである。描かれている世界は本当に便利そうで、不可能も可能になっていて、あらゆる部分に心惹かれる。しかし一方で、そこにはそれら感情あるロボットも簡単に破棄される世界が広がっている。感情のあるロボット、この生物と無生物の二つの側面を併せ持った、実際には非常に難解な存在を人々は自分の都合の良いように生物にも無生物にも扱っているのである。元々は機械、スイッチを切ればそれは金属の集合体に過ぎない。現実においての使い捨て文化を示唆しているようにも感じられた。

ii．愛情

一口に愛情といっても様々であるが、この作品は母子間の愛情を題材としている。本編で主役のデーヴィットは愛情を持つ初めてのロボットという設定になっており、母親・モニカに愛されたい一心であれこれする姿は正に人間の子どもそのもので非常に愛らしく、そして切なくて胸をうたれる。最初はデーヴィットからモニカへの一方向の想いであったが、その姿に母性本能をくすぐられてかモニカもデーヴィットを愛し始める。一方向の愛が双方向に変わった瞬間、それまでのデーヴィットの健気さが報われた事に対して安堵し、とても心が温かくなった。やはり母と子の愛というのは本当に無償の愛なのだと感じた。しかし、その心の温もりは長くは続かなかった。結果的にモニカはデーヴィットを捨てることになるのだから。しかも自分たちの勝手な都合で捨ててしまうという、一番あってはならないパターンだ。これに対しては怒りを覚えたけれども、捨てた際の悲痛そうな面もちのモニカ、両目に涙を浮かべながらデーヴィットの元を去った彼女の姿を見ると、これが苦渋の選択であったことは容易に理解できる。確実に破棄されるのがわかっている場所ではなく、どこかで生き延びる可能性がある山中にデーヴィットを置き去りにしたのは、彼女のデーヴィットに対しての愛が断ち切れていない証拠であろう。捨てたことについては理解を示したくはないが、その時の感情については、思わず自分を重ねてみてしまった。期間がいくら短くとも、愛した息子を置き去りにするなんて。本当に耐えられない。胸が張り裂けそうになった。

捨てるならば買うな、育てられないならば産むな。 単純なことである。しかし現実で、幼児虐待やネグレクト、乳幼児捨棄等の問題は絶えない。何と残忍であり無責任な話であろうか。新聞やニュースでこのような事件を目にすると悲しくなる。人間に関わらず、命というものはそんなに軽く扱って良いものではない。だから保護者・保有者としての責任は大きいのである。捨てられた側の気持ちになることができたらそんなこと恐ろしくてできないだろう。

Ⅳ．命の軽視について

“命”を軽視する事に対しての危惧は以前から浮上していた。科学技術は発達を重ねているけれども、それに反比例するように人の感情は衰退していっているのではないか…。これに対し、深刻化しすぎた問題を何とか払拭しようといろいろな活動が起こり始めている。最近では日本の小学校の道徳教育の見直しが進められ、命の重さ・大切さを子ども達にしっかり伝えようという動きが見られる。はっきりとした成果は出にくいだろうし、仮に出たとしてもずっと後の事になるだろうが、この世に生を受けて生きていく人間としては非常に大切な問題である。

科学技術の進歩は、豊かでありたい、そう願う人々の“感情”から生まれたものである。

この“感情”が逆に私たち人間の感情を消してしまわないように、人間と大差ないロボットまでもが簡単に破棄されていくような、そんなモラルのない未来を迎えることのないように私たちが次の世代を担っていかなければならない。

⑧学んだこと、得たもの：ロボットが感情を持つことにより、生活はより便利になるが、感情あるものを破棄するという残忍なこともできるほど人間の内面は衰退していく。この技術への依存の恐怖。そして、母親と子どもの愛という普遍的愛情の尊さを再認識した。外面よりも内面が豊かな人間でありたい。
⑨英語サマリー：In the future, robots will have feelings. To be sure that it makes our lives more convenient, but in contrast, our feelings will be poorer than they are now. People may become cruel enough to throw away robots which have feelings. This is a fear of deep dependence on technology and belief in it. Moreover, I had a new understanding of the preciousness of universal love between a mother and her children. I hope that people will regard others as wealthy from what one is rather than what one has.

参考資料

・『ARTIFICIAL INTELLIGENCE:A.I.』Warner Bros.
（２００１年日米同時公開，２００２年３月 DVD 発売）
・Yahoo!映画－A.I. HP: http://moviessearch.yahoo.co.jp

『不都合な真実』
—脅かされる私たちの地球—

池田　真利子

①タイトル：*An Inconvenient Truth* in Our Environment
②名前：Mariko Ikeda
③所属：文化研究専攻欧米言語文化講座　英語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：世界の環境問題と原因・アメリカ社会における大統領の位置づけ・映画タイトルにある“不都合な真実”とは何か・京都議定書とアメリカの対応・国別の問題意識の違い

I. 映画について

作品名：*An Inconvenient Truth*　(2006年アメリカで公開、パラマウント映画)

日本では翌年『不都合な真実』というタイトルで公開。

監督：デイビス・グッゲンハイム (Davis Guggenheim)

製作総指揮：ジェフ・スコル (Jeff Skoll)

内容：この映画は、地球温暖化問題に熱心に取り組んできた元アメリカ副大統領アル・ゴア (Al Gore, 1948～) のスライド講演の様子をドキュメンタリー化したものである。アル・ゴアの生い立ちを辿ったフィルムを交えつつ、瀕死の状態にある地球の現状を訴えるこの映画は、全米公開後大ヒットし、多くの観客に影響をもたらしている。過去の気象データや、温暖化の影響を受けて衝撃的に変化した自然のフィルムを提示し、この問題を直視しない政府の姿勢を批判する。大統領選の落選後、ゴア氏は世界中を回って環境問題に関するスライド講演を続けてきた。生活の中での環境を守る努力の重要さを主張するゴア氏を追った映画である。また、第79回アカデミー賞においては長編ドキュメンタリー映画賞・アカデミー歌曲賞を受賞した。その後、ゴア氏はIPCCとともに2007年のノーベル平和賞を受賞。

興味を持った理由：京都議定書にアメリカが調印していない一方で、環境問題の深刻さを訴えるアメリカ映画が話題となり、実際のアメリカ社会での衝突に興味を持ったから。また、映画のタイトルに惹かれたから。“不都合”の意味、そして“真実”とは何かが知りたいと思ったから。

アル・ゴア（Al Gore, 1948～）
IPCC とともに 2007 年ノーベル平和賞受賞。

“One of the most important films of our time”
と記された映画ポスター

II. 映画の魅力

この映画に出てくる資料は、地球環境の深刻さを伝えるものばかりである。過去 1000 年間の地球の平均温度推移、過去と現在の氷河の様子、カトリーナなど急増するハリケーンや日本での台風災害などである。また最高気温を記録している地域の出現、降水量の異常な変化、中国での大洪水、アフリカでの干ばつと水不足の悪化、絶滅種の急増など、すべて地球温暖化の影響であるという事実は驚異的である。鳥インフルエンザや SARS の蔓延などは私たちの記憶にも新しい。

私がこの映画に興味を持った理由は、第一に、アメリカが京都議定書への参加を拒否している点である。アメリカ元副大統領であるゴア氏がこのような映画を作成し、環境問題改善を強く主張し大きな反響を呼んでいる一方で、実際にはアメリカは京都議定書を拒否し、環境問題に積極的ではないのが現状である。一つにこの映画が大きく話題となっている理由に、そのデータや推論の誤認や誇大化が批判されている点にもある。環境問題だけではなくブッシュ大統領との衝突、また国内での政治的な問題が顕著である映画ともいえよう。のちにアメリカの環境問題への取り組み、また京都議定書の詳細について述べていきたい。

次にこの映画に惹かれた理由に、そのタイトル“An Inconvenient Truth”が挙げられる。非常に魅力的なタイトルであり“Truth”とは何か、どう“Inconvenient”であるのか、を知りたくさせる。この本当の意味での“真実”が明かされるのは映画後半であるが、ゴア氏が伝えたかった“Truth”とはこの映画の始めから掲載されている切迫した地球の状況すべてであろう。環境問題は多くの政治家や企業経営者が耳を傾けない“不都合な真実”である。これは京都議定書において政府が参加を避けるため改ざんした環境報告書、すなわち改ざんされた地球温暖化を警告する資料、これこそが“An Inconvenient Truth”であると明らかにしたゴア氏の言葉に表される。国益、経済発展が妨げられる真実。これは問題の深刻さを認識していない私たちの利己的な観点である。実際には、人類にとって早急に立ち向かわなければならない真実、であるとゴア氏は主張する。確かに深刻な環境問題は、もうすでに十分私たちの身に降りかかっており、地球が瀕死の状態であるサインは示されているのである。

ゴア氏の印象的な言葉に**“衝撃が与えられるまで人間はなかなか対処しようとしない”**
“物事の結果を描きにくいのが人間である”がある。人間は自分たちの利益ばかりに焦点を当て、本当に見るべき危機に気付かない。これらの言葉は彼の実生活に基づいている。ゴア氏の地球環境問題解決への使命感は非常に強固で、その姿勢には心打たれるものがある。また彼のこの関心のきっかけは、これらの言葉に現実味を帯びさせるのだ。**きっかけは、彼の幼い息子の交通事故で瀕死の重体に陥ったとき“かつては緊急のことに思えていたものが、本当は取るに足らないものだと突然わかった”ことだという。**最も身近な家族の命が危機にさらされたとき初めて気付いたこと、それは一つの命の尊さだけではなく、人間の愚かさだったのかもしれない。緊急のことに思えていた目先の利益より大切なものは、目に見えず、衝撃が与えられて私たちはようやく対処しようとするのだ。病気になって初めて日ごろの健康に気遣う、あるいは交通事故にあってようやく安全運転を心がけるのが私たち人間である。彼の講演中の数々の言葉は決して環境問題を客観的に訴えるものでない。彼自身の問題と認識し、自らの言葉で訴えるのがわかる。自ら危機意識を持った思いが、説得力を持った言葉で視聴者に語りかけるのである。彼のメッセージは日常生活の小さな心がけを訴えるものでもある。わかっていながら目を背けがちなこと。誰でも思い当たるはずである。状況が悪くなってから対処するのではなく日ごろから心がけよ、という彼のメッセージ。宿題を後回しにしてせっぱ詰まったときの私、日々勉強しようと思いながらテスト前にしかしなかった自分に、ずばり必要なメッセージである。同時にゴア氏は、私たちが環境についてできることは、一人ひとりが温暖化について知ること、また日々の暮らしの中で小さな努力を重ねることだと主張する。節電、ごみの分別、車の不使用、エコバッグの使用、リサイクルなど、やるべきことは身の回りにあふれている。そして彼は私たちに「不都合な真実」に真摯に向き合うことを促している。

Ⅲ. 地球環境の実態

次にこれらのゴア氏の言葉を受け、環境問題に対する世界の動き、また私が最も興味を持った京都議定書について、調べたことを述べていきたい。

ｉ．温室効果ガスの排出

まず、アメリカと世界の地球温暖化に及ぼす影響を提示する。二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの排出量に着目すると、世界でその数値は戦後４倍に増加しており、その６割は先進国からである。特に、アメリカ、カナダ、オーストラリアでは大幅な増加を続けており、日本もその一つだといえる。ここで、世界の排出量の内訳は以下のとおりである。（EDMC/経済統計要覧 2007 年度版）

世界の二酸化炭素排出量２６５億トン（2004 年）のうち、アメリカが 22.1%、中国 18.1%、そして日本 4.8%となっており、南北格差が顕著である。

また、一人当たりの排出量の比較は、アメリカ 19.69 トン、オーストラリア 16.98 トン、カナダ 13.79 トン、続いてロシア、ドイツ、イギリス、そして、日本 9.31 トン、世界平均 4.14 トン（米国オークリッジ国立研究所データ，1996 年）

となっており、アメリカ一人当たりの排出量は世界平均の５倍近いことがわかる。また、日本でも世界平均の 2 倍以上を排出している。このように、温室効果ガスの排出量によって地球温暖化への先進国の責任の大きさがよくわかる。気候変動枠組み条約では「共通だが差異ある責任」という言葉を使い、先進国に先に対策をとるよう求めているのである。国別の二酸化炭素排出量の大きな差は、世界の貧富の差、技術の不均衡さを如実に表している。また、限りある資源は確実に先進国の手にゆだねられていることがわかる。人類に共通した環境問題、それは大いに先進国の責任である。

ここで、環境問題対策に関する世界の動きを示す。

ii．世界の動き

1972年　**ストックホルム会議**

国連人間環境会議：会議の議題は　環境（先進国）VS開発（途上国）。採択された決議は、途上国の開発と貿易に対する、マイナスの影響を歯止めする動きである。

1972年　**国連環境計画**（UNEP：United Nations Environment Programme）創設。

1989年～　米ソの冷戦状況の弱まり→国際政治が地球環境問題に向かう。

ガスの排出規制などに消極的だった英仏の突然の政策転換。

1992年　**リオ会議**：「持続可能な開発」の推進→最終的には南北格差の解消が目的。

気候変動枠組み条約締結。国連開発環境会議（地球サミット UNCTAD: United Nations Conference on Environment and Development）、**アジェンダ２１、生物多様性条約**　など、世界規模での取り決めがすすむ。

2002年**「持続可能な開発に関する世界首脳会議」（ヨハネスブルクサミット）**191カ国の参加。開発途上国の開発問題に議論が集中する。

- アメリカの孤立：生物多様性条約署名を拒否。アジェンダ21において地球環境資金および政府援助金の出資を拒否
- 基本的構図は、先進工業国VS後進工業国
- 途上国側；開発発展のためには汚染は必要であるという考え“We want pollution!”

このように、環境問題は今まさに世界で最も深刻、かつ注目されている問題である。環境保全だけでなく、貧富の差、経済発展、貧困問題、とさまざまな社会問題を含んでいる。さて、ここで注目されるアメリカの孤立は、京都議定書への参加拒否が大きなポイントとなっている。

映画でゴア氏が温暖化のすさまじい潜在的能力を述べた後、その解決策として強く主張するのが京都議定書への参加である。2010年までに先進国が炭素排出量を30%削減することを目指す「京都議定書」に世界中が賛成すべきだと。二酸化炭素の排出が世界で最も著しいにもかかわらず、京都議定書への不参加の姿勢をとるアメリカを、ゴア氏は環境破壊型の生活様式であるとまで批判した。これはどういう意味であろうか。アメリカの京都議定書参加の意味とは何だろうか。そこで、京都議定書の概要を示していきたい。

Ⅳ. 京都議定書

京都議定書とは1997年に採択された議定書で、温室効果ガスの削減値を先進国全体で５％とし、先進国の温室効果ガス排出量に具体的な数量制限を設けたものである。2008年～2012年の間に、各国の 1990 年における排出量を基準とした数値に削減することを義務付ける。主要国の削減率は、日本６％、米国７％、ＥＵ８％、カナダ６％、ロシア０％などと定め、全体で5.2%の削減を目指す。これらの削減目標には法的な拘束力がある。京都議定書には、日本やＥＵなど125カ国が批准したが、ブッシュ米政権は2001年にこれを離脱。京都議定書が発効するためには、批准した先進国のＣO2の排出量が1990年時点の55%以上なければならないため、発効ができない状態が続いていた。しかし、ロシアが 2004 年 11 月に批准したことによって、米国抜きでもＣO2の排出量が61%を超えることになり、2005年２月京都議定書が発効した。

ここで問題点は、最大のガス排出国であるアメリカが参加拒否していることである。最も正直な離脱の理由は「国益にかなわず、経済発展が妨げられる」からであるが、アメリカ議会は「途上国に削減義務がないことはアメリカ経済に不利」とし、京都議定書に反対の立場をとっている。相当数の途上国が議定書に参加しなければ批准はできないという姿勢をとっている。その背景には石油業界などが議会に対して強い影響力を持っていることがあるが、現状では、途上国は先進国が先に対策をとるべきだと考えている。先進国のCO2 排出量の３６％を占めるアメリカが参加しない議定書の効力が疑問視されているのである。

議定書においてまた一つ重要な問題は、各国により削減コストが大幅に異なることである。結果、削減の容易な国や工場などで多くの削減を行い、取引することによって社会全体の削減コストを小さくするという考えが主張され、国際的に協調して目標を達成する仕組みとして「京都メカニズム」が導入された。これは柔軟性措置として、主なものに排出権取引があるが、これは各国の削減目標達成のために先進国同士が排出量を売買する制度である。現在、明確な上限枠を設定するかで議論がなされている。しかし、この排出権取引制度は、結局は先進国での国内削減をゆるめてしまうことであり、公平性に欠ける。また、ロシアなどは経済混乱などで排出量が大幅に減少していることから、最初から余った排出の割当量を有している。そのため安く排出権が売買されることによって、先進国では国内での削減どころか増加を容認することになってしまう、と批判されている。ようやく出来上がった二酸化炭素削減目標、これにまたしても目を背けようとする動きが加わっている。要するに、環境問題をお金で解決し、他の国に対策を任せてしまおうという考えである。京都議定書に作られたほんの小さな逃げ道は、今大きな問題に発展している。

環境問題について調べて、自分がいかに環境問題について知らなかったかに気付いた。これほどまでに切迫し、世界でも問題解決にあらゆる動きが見られる一方、先進国市民の問題意識は実に偏っている。ゴア氏のように危機意識を持って強く訴える人がいる一方で、経済発展を優先する人々、問題の深刻さを知らない人々、あるいは自分が無力であると思い込んでいる人々が大半である。一人が節電を心がけたところで大きな変化がないように思われる。しかし、それぞれの協力によって確実な変化を成し遂げられるのだ。これは世界の縮図とも言えるだろう。世界の一つ一つの国の危機意識が偏っているがゆえに、多くの問題が生まれている。京都議定書においても、一国が努力したところで、温室効果ガス排出量最多のアメリカが参加しないことにはその効果が小さいのは明らかである。各国が協調し、地球規模で大きく運動を進めねばならない。ゴア氏が言わんとした不都合な真実、とは環境問題だけではなく、世界中での貧困や経済発展に基づく世界の不均衡さを含めたものなのかもしれない。経済発展や国益ばかりを追求し資源にあふれた私たちが、目を背けがちな世界各国の問題は、温暖化を始めとしていよいよ緊迫し、その解決を訴えている。

⑧**学んだこと得たもの**：日々の生活で私たちは、わかっていながら目を背けたり後回しにしてしまうことがある。人間は目先の利益を優先しがちで、本当に大事なものに気付きにくい。失ったり衝撃を受けてはじめて気付くことが多いのである。ゴア氏が訴える環境問題はその一つである。不都合なことを見てみぬ振りをしてきた結果、地球上の最も深刻な問題になっている。環境問題の困難な点は、実際にはその根底に人々にとって“不都合な真実”すなわち環境問題だけでない貧困や経済発展に基づく世界の不均衡さを含めた問題があることである。経済発展や国益、目前の自分の利益ばかりを追求し、豊富な資源にあふれた私たちが目を背けがちな世界各国の問題。それは、温暖化を始めとしていよいよ緊迫し、さまざまなサインを出して解決を訴えている。

⑨**summary** : *An Inconvenient Truth* focuses on Al Gore and his efforts to educate the public about the severity of the climate crisis. I have learned that what makes the environmental issue complex is the fact that there are many other problems such as poverty, unbalance in progress, and biases of perspectives over the world, to which we have blinded ourselves for a long time. “An inconvenient truth” is not only the environmental crisis, but also all the problems we have to face in the world. In addition, we should realize that we tend to emphasize our immediate profit, and to lose what is really important.

参考文献

気候ネットワーク『よくわかる地球温暖化問題』東京，中央法規，2000 年

杉田　米行　『アメリカ社会への多面的アプローチ』岡山，大学教育出版，2005 年

原　彬久　『国際関係学講義』有斐閣，2006 年

『アイ，ロボット』

～我々と機械はどのように関わるべきか？～

足立　亜衣莉

①英語タイトル：Human Beings and Robots　～How Should We Deal With Machines?～
②英語名：Airi Adachi　③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④
⑤　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：近年、ASIMOなど様ざまな人型ロボットが開発され、色々な場面で役立てようとされているが、実際どのような人型ロボットが今現在開発されているのだろうか。また、そのように私たちの生活の中にロボットが入り込み、人間とともに生活していくことは果たしていいことばかりなのであろうか、ロボットだけに限らず、機械に頼って生活している私たちはこれからどうすべきなのかということに疑問を持った。

Ⅰ，はじめに

私はこの映画を見たことで、機械がいかに我々の身近にあり、役立つものであるかを実感すると共に、我々の現在の機械に頼りすぎている生活の危険性や、人間と人間との生身のコミュニケーションというものの大切さを強く感じることができた。この論文を読んでいただけるのならば、この映画の中で起こることは空想であると考えるのではなく、少しでも自分が生活している現在のことと関連付けて読んでもらいたいと思う。

Ⅱ,映画『アイ，ロボット』(　*i, ROBOT*、2004年日米同時公開　)の内容

舞台は2035年のシカゴ。世界には人型ロボットが当たり前のように人間と共存しており、人々もロボットに大きな信頼を置き、生活の大きな支えとしていた。そんな時、USR(U.S.ロボティックス社)から、更新不要でグレードアップした新型ロボットのNS-5型が発売されようとしていた。

←新型ロボットのNS-5
旧型ロボットのNS-4→

機能やもちろん体つきや表情も新型NS-5のほうがより人間味が増し、人間に親近感を沸かせる風貌となっている。

しかし発売間近の時期にこのロボットの考案者であり、ロボット工学の第一人者である、ランニング博士がUSR社で自殺を図る。そこに呼ばれたのは、ロボット嫌いのシカゴ市警スプーナー刑

事。ランニング博士の死が自殺ではないのではないかと感じ、捜査を始めるスプーナー刑事は、USR主任ロボット心理学者カルヴァン博士に案内され、ランニング博士の研究室へ向かう。そこで、捜査を続けていると、物陰に隠れていたNS-5が飛び出してきた。そのNS-5は全てのロボットに備えられているはずのロボット三原則に従わず、命令に背き逃げていった。しかし、結局そのNS-5は博士殺害の犯人として警察につかまる。スプーナー博士はそのNS-5の取り調べをするが、彼は自分の名はサニーで、自分はランニング博士殺しの犯人ではないという。そこへUSRのロバートソンが現れ、三原則が備わっていないサニーを不良品として処分するために引き取りに来た。サニーの話を聞く中で、サニーは犯人ではないのではないかと思い始めたスプーナー刑事はランニング博士の家に捜査に行く。

博士の家には自動破壊装置が仕掛けられおり、設定時刻は翌朝であったが、破壊装置が誤作動を起こし、中で調査中のスプーナー刑事は家もろともつぶされそうになってしまう。また次の日、調査のためUSR社へ向かうスプーナー刑事は途中にNS-5の集団に襲われ、命を落としそうになる。怪我を負ったスプーナー刑事のもとにサニーのことを話しにカルヴァン博士がやってくるのだが、彼女はそこでスプーナー刑事が機械移植を受けていることを知る。話を聞いてみると、スプーナー刑事は以前交通事故に遭った際にロボットに助けられた経験があるという。トレーラー事故により川に自分ともう一台の車が水没してしまった。もう一台にサラという少女が乗っていたのだが、助けにやってきたNS-4は理論的に判断して生存率の高いスプーナー刑事を助けたのだが、目の前で助けを求めるサラを無視し、自分を助けたNS-4に対して怒りを感じた。それ以来、彼はすべてを理論的に判断し行動するロボットを嫌うようになったのだという。

その後USR社に2人は向かいサニーに話を聞くことに。スプーナー刑事はサニーの話を聞き、話に出てきた場所に向かうとNS-5がNS-4を破壊している光景を目の当たりにした。その頃街中でもNS-5が人間の命令に背いたり、若者たちとロボットの攻防が起きるなど大変な事態となっていた。反抗するロボット達の胸はみな赤く光っており、誰かに操られているようであった。そんな様子を目の当たりにし、スプーナー刑事はカルヴァン博士ともにロボットたちを操っている本元のUSR社へと向かい、社内になんとか忍び込んだが、そこには処分されたはずのサニーいた。カルヴァン博士は特別な機能が備えられているサニーをどうしても破壊することが出来ず、他のNS-5とすり替えていたのだった。三人はUSR社の中を進んでいき、ロバートソンの部屋に着く。そこではロバートソンは死亡しており、操っている犯人はロバートソンではなく、なんとUSR社のコアシステムを担っているVIKIであった。彼女は人間のやり方に不信感をいだき、人間を守るためにはある程度の犠牲は必要であり、私たちロボットが支配していかないといけないと考え、NS-5を操っていたのである。スプーナー刑事らはVIKIに操られ攻撃を仕掛けてくるNS-5達と必死の戦い、逃げ回りながらも、何とかVIKIのシステムを破壊し、NS-5たちの暴走を止めることに成功し、人間世界がロボットに支配されることから守ることが出来たのであった。

この映画を見て、私が第一に感じたことは「ロボットへの恐怖感」である。もちろん現在の世界においては、この映画の中のようにロボット技術が発展しているわけでもないし、人型ロボットが街や家庭に普通に存在しているような状況とは程遠い。しかし、このままロボットの研究が進めば、近い将来こんな状況になりうるのではないかと感じたからである。これは、映画の中だけで起こる空想のことではなく、近い未来私たち自身にも降りかかる問題なのではないかと私は考

える。そしてこれを私たちの未来に対する警告と捉えるべきであろう。また、人間の無力さというものも感じた。このようなすばらしいロボットを開発しときながらも、自分たちが作り出したものに支配されそうになってもなにもすることが出来ない人々の姿を見ると悲しくなると共に、ロボット化・機械化が進む現在の世界に対しても危惧を抱かずにはいられなくなった。

Ⅲ,現在実在する人型ロボット

次に現在我々の住む、この世界に実在するロボットについて調べみた。
ここにいくつかの例を挙げてみる。

ASIMO　2005　(Honda)

IC通信カードを利用し、人を識別し応対・人の位置を特定・人と距離を測定・すれ違う人に挨拶・手つなぎ歩行などが可能。また、視界センサ・床面センサ・超音波センサを駆使して複雑な環境でのスムーズな歩行も出来る。その他、高速走行、高速旋回走行、スラローム走行、ワゴン操作、トレイの受け渡しなどもすることが出来る。

nuvo　(ZMP)

家庭用ロボットで、制御理論により安定した歩行を実現。また、ロボット初の、人間工学に基づく専用シューズ“N－sole”により、衝撃と蹴り出し時の力強いグリップ、安定性がさらに強化される。
歩行の他に、起き上がり・ダンス・挨拶・写真撮影・外出先からの室内確認・音声認識も可能。

wakamaru　(三菱重工)

音声を認識したり、発話するだけでなく、備え付けられた２つのカメラにより人の顔を探し、覚えている人の顔と照合するので、アイコンタクトを伴う会話ができる。また、活動開始・終了時間を所有者が設定でき、また活動の種類もカスタマイズ出来る為、人の手を借りない自立行動をすることが出来る。歩行の際には５つのセンサで障害物を認識し、回避する障害物回避技術が備え付けられている。

上記の例以外にも国内にも国外にもまだまだ多くのロボットが開発されている。まだ、実用化されておらず、開発途中のものも多いし、映画中のように何もかもやってくれるロボットは存在しないが、我々と人型ロボットが生活をともにする日はそう遠くはないだろう。

私は現在実在する人型ロボットといったら、せいぜい2,3種だろうと思い込んでいたので、調べていく中で、その数の多さに驚いた。現在、本当に多くの企業や個人がロボットを開発や研究していることにびっくりし、またそこから人々のロボットに対する関心の強さ・期待の大きさが伺えた。また、テレビでしかロボットが動いていることは見たことはないが、その動きの滑らかさや細かさなど、その技術の高さにはただただ感心するばかりであり、また生で実際にロボットを見てみたいと思った。私が想像していたよりも、人々のロボットに対する関心や期待は大きく、技術も進んでいることが分かり、映画のようにロボットと人間が共存するような世界もそんなに遠いことではないのではないかと思う。

Ⅳ,映画を見て感じたこと・学んだこと

A,機械を信用しすぎると…

この映画を見て思ったことがいくつかある。まず初めに、機械やロボットを過信しすぎるのはよくないということである。この映画の中でも重要になるポイントだが、あまりに人々がロボットは「Ⅰ、ロボットは人間に危害を加えてはならない。また危険を看過することによって人間に危害を及ぼしてはならない。 Ⅱ、ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、与えられた命令が第一条に反する場合はこの限りではない。 Ⅲ、ロボットは前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己を守らなければならない。」という三原則を破るわけがなく、人間に従わないわけがないと信じて疑わなかったため、人間世界にロボットが氾濫し、あのような事態が起きてしまったのである。しかし、これは映画の中だけのことでなく、実際に私たちの住む日本においてもあてはまることである。最近でいえばシンドラー社のエレベーター転落事故やエキスポランドのジェットコースター事故など機械事故が多発しているが、これらは機械の安全性に信用を置きすぎ、人々が点検を怠ったため起きてしまった事故である。このようにあまりにロボットや機械を過信するあまり不意に起きる事故が、機械に頼れば頼るほど出でくる可能性が大いにあると思うので、あまりにもロボットや機械の能力を過信しすぎず、しっかりと生身の人間が様ざまなこと、特に人間の命に関わること、に責任を持って点検や管理をしていくべきだと考えた。

また、あまりにロボットを過信していると、それを失った時に人々がどう生きていくのかということに不安を抱いてきた。今現在の私の生活を振り返ってみると、自分自身どれだけ機会に頼っている生活をしていて、どれだけ機械に助けられているのかということを改めて実感することができた。映画の中のように普通に街中をロボットが歩いていたり、家事をしていたりするような世界ではないが、現在の私たちの世界にも生活に必要な洗濯機や食器洗い機、冷蔵庫、冷暖房など家電だけでなく、いまや欠かせないものとなったテレビやパソコン、携帯電話など多くの機械が私たちの周りにはあふれかえっていて、私たちの生活を支えてくれている。それが一気になくなってしまったら人々は生活が出来なくなってしまうのではないかと心配になるのである。も

ちろん多くの機械が私たちの生活の中に存在することで、私たちが大きな恩恵を受け、便利な生活を送れているのは事実だ。しかし、私たち一人ひとりが機械に頼らず、自力で生活することの大切さ・重要さに気がつかないといけないと強く感じた。このことから機械と人間自身の力というものに境界線をしっかりと作って生活すべきだと思う。

B,機械が我々のコミュニケーション能力に与える影響

機械に生活を助けられている現状に気づかされる一方、**人間と人間とのコミュニケーションの大切さ**も改めて実感した。テレビを見ていて楽しいと思ったり、ゲームをしていて面白いと思ったりすることはもちろんあるが、人と実際に話をしていて感じるそれらとはやはり同じようで大きく違うものだと思う。人と対面して実際に会話をすることでしか、相手の表情や声色などを直に感じることができず、そこから相手の気持ちを汲み取ることや相手と面白さや楽しみを共感できることの喜びなどが感じることはできない。私個人ではテレビやゲームで面白いと思っても、やはりその面白さは友人と会話したりしてコミュニケーションをとっている時の面白さとは比べ物にならないと感じる。テレビやゲームの機械の画面を見ていて感じる楽しみや面白みだけでなく、人間同士でのコミュニケーションだからこそ得られる何かがあることを私たちは忘れてはいけないし、もっと人間同士のコミュニケーションを大切にしなくてはならないと強く感じた。

さらに、これからますます機械などが発展するにつれて、それにともない私たちの生活にもさらに機械が入り込み、生活がどんどん機械化し、人間離れしていってしまうのではないかと不安を感じる。例えば仕事の現場において、メールや電話など直接相手に会わなくとも連絡を取ることが可能になり、以前より人と面と向かって対話する機会は減少しただろう。また、子供たちも昔は友達同士連れ合って公園などで遊んでいたのが、いまや遊び相手がWiiやプレーステーションなどのゲームに変わり、テレビやゲームの画面と向き合ってばかりで生身の人間との会話は明らかに減ってしまっているだろう。このままどんどん私たちの生活の機械化が進んでいけば、もちろん利点も多くあるのは事実だが、人間同士のコミュニケーション不足となり、コミュニケーション能力の低下が引き起こされるのは間違いない。世界全体がそのように機械やロボットばかりを相手にし、人とのかかわりを求めないような世界になっていくのなら、コミュニケーション能力の低下など何の問題もないだろが、そういうことにもいかないだろう。**特にこれから社会に出て行く子供たちのコミュニケーション能力とゲームとの関係、どのようにそれを改善していくかがこれから大きな問題となるのではないだろうかと思う。**

C,改良や新製品の開発

また、この映画のような状況はロボットの側からしたらものすごく悲惨で残酷なことをしているなと改めて気づかされた。映画の中ではURS社の新型ロボットNS-5が出来たらすぐに前の型のNS-4は回収され、保管庫に送られ用無しとなっている。これは映画の中のこのロボットたちに限らず、われわれの生活する現実社会でもよく見られることである。例えば、携帯電話の新しい機種が出たら、壊れていなくても機種変更をする人は多い。また、携帯電話だけでなくデジタルカメラやオーディオ機器などにも当てはまる。人間にとっては機能がグレードアップしたり、本体が軽量化されたりと利点ばかり手に入るのだが、捨てられたり、回収されたり、廃棄される機械

にとってはとてもひどいことである。もちろん映画の中のNS-4やNS-5のように人型をしているわけでもないし、サニーのように感情を持っているわけでもないので実際つらさや悲しみを感じていることはないのだけれども。また、このような使い捨て状態が進めば、捨てられた機械がごみになり、続々とごみが増え、環境にも悪影響を及ぼすだけである。我々は自分たちが生活しやすい世界を求めるあまり、地球にも後に地球を担っていく子孫たちにも大きなダメージを与えているのが現状なのである。このように一見いいことばかりのように見える新型開発とか機能性アップといったことは、あくまでも人間のエゴにすぎず、裏には色々な問題が潜んでいる。私たちは今の自分たちの利益ばかりを気にしているばかりでなく、後々のことも考え、現在のような機械の使い捨て状態について考えなおすべきだと考える。

⑧学んだこと・得たもの：

ロボットや機械が私たちの生活において大きな支えとなっていることは事実であるが、あまりにもその安全性や機能の正確さを信用しすぎることはよくない。私たちは、人間自身の力で何かを成し遂げることの大切さを忘れずに、ロボットや機械の力と自分たちの力との間にある程度境界線を引くべきだ。そしてロボットに頼り過ぎない人間らしい生活が出来るように心がけるべきである。

⑨SUMMARY：

It is true that robots and machines are important support for our life. But it is not good that we have too much confidence in their safeties and functions. We should keep in mind the importance that we work out something by our own abilities, and we have to separate a power of robots from that of human beings. In addition, it is important to live not depending on robots and machines too much.

《参考DVD》

『アイ、ロボット』 (NS-4&NS-5画像　引用)

発売元：20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント・ジャパン　発売日：2005/07/07　　監督：アレックス・プロヤス

出演者：ウィル・スミス / ブリジット・モイナハン　他

《参考文献》

『われはロボット』　〔決定版〕

著者：アイザック・アシモフ　訳者：小尾芙佐　発行所：早川書房　(2004年)

《参考ホームページ》

Hondaホームページ (ASIMO画像　引用)

http://www.honda.co.jp/robot/

ZMPホームページ　(nuvo画像　引用)

http://www.nuvo.jp/nuvo_home.html

三菱重工ホームページ　(wakamaru画像　引用)

http://www.mhi.co.jp/kobe/wakamaru/

http://www.hss.ocha.ac.jp/psych/socpsy/akira/media/vr_game/vr_game.htm

あ と が き

大阪教育大学米文学研究室出版の論集も、今回で5作目となりました。2003年に『アメリカ～エンターテインメントの世界』で始まった出版は、毎年新たなテーマを模索しながら、『日本で見つけたアメリカ～戦前日米交流史～』(2004)、『米文学史のなかのアメリカ文化研究』(2005)、視点を変えた前回の『ジャパニーズ・ポップ・カルチャー2006～日本の若者・大衆文化のいま～』(2006)と続き、そして、今回もまたいろいろな苦難を乗り越え、完成の運びとなりました。

様々な学内外の忙しさのため、なかなか思うように進められない時期もありました。また、例年以上に執筆者が集まり、個人研究費の範囲内では、例年のように美しいカラー写真を何ページにもわたり掲載した口絵の部分をつけることができないという、予算面での悔いも少し残してしまいました。

また新しい時代の「映画を扱った論文」ということで、著作権の問題に関しても、少々の不安がありました。勝手に写真を使用してもよいものだろうか、俳優の写真や企業のロボットの写真などの扱いはどうしたものかという迷いもありました。この件に関しては、「(社)著作権情報センター」に直接問い合わせ、結果的には、著作権法第32条に照らし合わせ、「研究のための引用」として使用すればよいとの返答をいただき、学生たちにも、執筆上の注意として周知しました。
(第三十二条　公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない。)

ともあれ今年もなんとか、このような形ではありますが、授業成果のひとつの結晶が、新時代の研究教育に対する一提案として誕生しました。例年のように、今年もこれを日本国内の大学図書館、公立図書館のみならず、海外へも発送したいと思っています。そして、今、OKUが進めているインターネットによる成果の公開に参加し、全世界に向けて授業現場の情報提供に協力していきたいと思っています。

幼い論文も散見されますが、何年か経つと、やがて「あの頃は若さにもあふれていたんだなぁ」と感じる日が来るのかもしれません。ひとつの記念碑にもなりそうです。

橋本　賢二

平成 20 年 2 月発行(February, 2008)

実学としてのアメリカ文学研究

—歴史・人物・作品・映画から学んだこと—

Practical Studies of American Literature :Useful Lessons from History, People and Works

発行者　大阪教育大学　米文学研究室
〒582-8582　大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
(Faculty of American Literature)
4-698-1 Asahigaoka, Kashiwara,
Osaka, 582-8582 JAPAN.

編　著　橋 本 賢 二
Editor & Author : Kenji Hashimoto

印刷所　株式会社アイジイ
〒531－0072　大阪市北区豊崎7－7－7
TEL(06)6371－0321

実学としてのアメリカ文学研究

― 歴史・人物・作品・映画から学んだこと ―